

南京防衛戦をめぐる周恩来戦略

判 澤 純 太*

(平成20年10月31日 受理)

Junta HANZAWA*

Zhou En Lai and the Nanjing Defense War

The core target of this paper in analyzing the 2nd Nanjing defense war in Dec.1937 is to make clear the real shape of the coalition between KMT and CCP under that war.

And, I also research into how Zhou En Lai dealt with the case as a CCP defacto top leader in that battle field.

Key Words: Zhou En Lai and Nanjing Defense

はじめに

かつて、武漢政府（漢口：湖北省）が崩壊（27・8・19南京遷都決定，同8・12蒋介石下野通電，同9・28蒋介石，日本へ外遊）したことによって，中国の労働運動に低迷状況が齎されることになった。二七年九月一五日，国民党三派（武漢，南京，及び上海・西山派）はいよいよ合流を果たし，同一七日，国民政府委員46名が新たに選出された。また，汪兆銘，胡漢民，李烈鈞，蔡元培，譚延闓らが，常務委員として選出された（28・1・4新・南京国民政府の要請を受けて，蒋介石は国民革命軍総司令に復職した〈ただし，それ迄，武漢政府は蒋介石の同職を，公的に更迭してはいなかったが〉）。

その様な状況の中で，新たに中国共産党リーダーに就いたのが李立三（李は，25「五・三〇事件」で，165組合〈組合員数約54万人〉を組織する総工会を指導した）であった。李は，多発的かつ連続的に都市蜂起を決行することに共産革命の活路を見出そうとしたが，本格的な武力を伴わない限り，一揆主義のみでは到底革命に成功する見込みは難しかった。

一方，それに代って「江西中央中華ソヴィエト区」（朱・毛根拠地）の存在が一躍脚光を浴び始めた。共産党紅軍は建軍草莽期にあった。その後，同根拠地から，「農村から都市を包囲」する，ゲリラ（平地遊撃），パルチザン（山岳遊撃）型闘争が生まれ出る。

一九三七年末に起った日・中「南京攻防戦」の中で，都市（南京城，上海，杭州）が再び「革命闘争」の舞台に戻った。共産党は今度は，如何なる戦略を用いて「都市」を包囲，

*国際関係論 教授

陥落させようとするのであろうか？

1. 「第一次南京事件」の幻（まぼろし）演出の内幕と譚平山

一九二五年三月に国父・孫文が死去してから、国民党右派は二五年一二月、北京の西山に会議を開いて結束しようと試みたが、なお微力であった。ところが、翌二六年三月二〇日に「中山艦事件」（共産党員の海軍局長・李之龍が、中山、宝璧の二軍艦を黄埔軍校に差し回し、蒋介石を拉致、殺害しようと計画した、と噂が立った事件）が発生するに及んで、蒋介石の心の中に、共産党を弾圧しなければならない、と言う意志が生じた。

一九二六年六月六日、広州政府は北伐を正式に決定し、蒋介石を革命軍総司令に任命した。広東元帥府は孫文の死によって廃され、政府指導部は委員制が採用された。

同年十一月二六日、広東国民党中央執行委員会は、漢口に新政府を樹立することを承認した。その決定に伴って、国民党左派である徐謙、宋慶齡、鄧演達らが漢口（湖北省、26・10・10 攻略：広く武漢とも称される）に相次いで乗り込んだ。コミンテルンが派遣したボロージン（Borodin）が、同地で漢口国民政府顧問に任ぜられた。

翌二七年一月一日、国民党政府は広東から武漢（漢口）に移転し、漢口を今後中国の首都にすることを決定した。漢口政府はコミンテルンから流れ込む資金を大いに当てにした。また、ガロン将軍（ブリュッヘル元帥の暗号名）を始めとする多くのソ連軍人顧問たちが、北伐軍に同行しており⁽¹⁾、彼らが漢口政府の藩屏となった。

一方、東南の隣接省の江西省では、孫伝芳（北洋派）が軍閥としての本拠地を南昌に置いていたが、蒋介石軍が二六年十一月二六日に孫伝芳軍を打ち破った。孫伝芳は北方への撤退に際して、それまで盟友と信じていた張宗昌、張作霖（いずれも北京・北洋政府を支えた軍閥）の支援を仰ぐつもりだったが、孫のその希望は叶わなかった。

東方軍司令・蒋介石は、翌一二月には南昌（江西省の省都）を占有し、その後、国民党執行委員会（広東）の残留委員組も南昌に合流した。二七年一月に開かれた南昌会議の結果、南昌は、漢口政府に宛てて通牒を發し、南昌に漢口が政府を合流する様に迫った。

しかしながら、漢口政府はこの要求を拒否した。漢口政府内では、ボロージンを政府顧問に迎えたことによって中国共産党の勢力が優勢であり、反共色に傾く蒋介石を警戒していた。

両政府（漢口、南昌）間の摩擦は、暫定的に政府と首都を漢口に定め、南昌は財務、労働、司法等閣員の本拠地とすること、で決着した、かに見えた。

ところが、世間一般には外交部長として陳友仁が華々しく活躍したこともあり、漢口が単独の代表政府であるかの様な感覚が行き渡った。漢口・「国共合作政府」の政・軍実権は、唐生智・第五方面軍総指揮、鄧演達（国民党左派）・総政治部主任、譚平山（共）・武漢政府農政部長、張發奎・第四軍及び第一軍軍長などのメンバーが握った⁽²⁾。

同二六年一月一六日に国民党二全大会で選出された中央国民党執行委員三十六人の顔ぶれ（汪兆銘248票、蒋介石248票でそれぞれ同数トップ票を獲得）を見ると、七名の共

産党員がその中に入っていた。ここで、その内トップ3に限った得票数を挙げると、譚平山246票、顧孟餘222票、李大釗192票、であった。

だが、我々が更にもう少し注意深く、次点候補者（落選者）迄内容を見れば、次点候補者のリストには、共産党員が圧倒的に並んでいた⁽³⁾ことが分かる（コミンテルン在中国代表マーリンは断固としてコミンテルン指令を貫徹するよう中国共産党に迫り、二二年七月、共産党二全大会は、民主主義連合戦線形成の必要を可決させ、中国共産党員に、中国国民党への個別加盟（共産党との二重党籍登録）を決議させていた）であろう。

宋慶齡、孫科、陳友仁、毛沢東、何香凝ら国民党左派、共産党が出席し二七年三月七日に開かれた国民党二期三中全会（漢口）は、「党の権力の集中性を高めよう」と言うスローガンを掲げたが、実態はそれとうらはらに、従来の主席制の集権性を廃止した。新たに改選された中央執行委員会常務委員は、蒋介石、汪兆銘、譚延愷（漢口政府軍事部長に任）、顧孟餘（漢口政府教育部長に任）、孫科（孫文の嫡男）、譚平山（共産党トップ・リーダー）、陳公博（国民党左派）、徐謙（中ソ大学校長・カラハンの顧問：国民党左派）、呉玉祥の九人であった。以上の九人は党名誉代表扱いである。

新しく政治委員会主席団に選出されたのは、汪兆銘、譚延愷、顧孟餘、孫科、徐謙、宋子文（南京政府財政部長）、譚平山の七人であった。この七人が来るべき（漢口、南昌）「統合政府」の政策の「集団指導メンバー」として想定されていた。つまり、蒋介石、陳公博、呉玉祥という三人が降格され、代って財務担当として宋子文が入った。

「打倒蒋介石」の雰囲気、第三次全体会議の背後に横溢していた。同会議は、これも主席制を廃止し、「軍事委員会」のメンバー一五人を新たに選出した（内七人は中央執委全大会義が指名）。蒋介石を、一五人の軍事委員会委員の一人の地位に格下げする意図があった。

同二期三中全会は他に、農政部長・鄧演達（国民党左派）、工人部長・陳公博（共産党から転向、国民党左派）、組織部長・譚平山、等の人事を決定した。これによって、譚平山⁽⁴⁾が共産党代表として、鄧演達（国民党左派）、陳公博（国民党左派）と連繫し、上海にいる党総書記兼政治局主席・陳独秀は別格として、共産党によって、国民党の「組織活動」の脊髄部分を押さえ込んだのであった（陳独秀は、長子・延年に北京の共産党党務実権を握らせ、次子・喬年には広東を、その他、兄の子、姉の子、弟の子、妹の子らにもこぞって各地の支部の重要党職務を任せ、共産党は、恰も陳独秀一家が全てを仕切る私党の如き様相を呈していた⁽⁵⁾という）。

この様な政治環境のもとで、二七年三月二四日「第一次南京事件」が発生した。蒋介石軍は三月二二日に上海を手中のものにし、二四日、次いで南京城内に入城した。「上海ゼネスト」の大波瀾の中で、四月一三日、軍司令部は、「総工会糾察隊」の便衣隊によって包囲された⁽⁶⁾。

そこに、国民党軍の軍服を「擬装」した部隊が、外国租界大使館及び外国人を襲撃するという事件が発生した。蒋介石は列国から糾弾されて窮地に立ったが、その真相は間もな

く露見した。その事件は、南京攻撃軍に加わっていた蒋介石第六軍中に共産党員が擬装して密かに紛れ込み、国民党軍兵士に扮しながら租界を狙い、外国人の殺傷事件を起こしたのであった⁽⁷⁾。

五月七日、英外務大臣は下院における演説で、蒋介石が「南京事件」（第一次「南京事件」）の犯行者を適切に懲罰したことによって、英・中摩擦は解消された、と、宣言し、同事件は急転直下幕を下ろした。

さて、この擬装ゲリラ部隊事件は、当時漢口で国民政府の組織脊髄を握っていた譚平山（漢口国民党中央執行委員・組織部長であり、同時に共産党のトップ、1886・9～1956・4：新中国になってから、56年「国民党革命委」〈中国共産党政府側の台湾国府組織統一組織〉副主席）が計画したのであった。

英「チェンバレン（外相オースティン・チェンバレン卿）外交」に揺さ振りを掛けようとして、譚平山は、項英・上海工人糾殺隊長、李立三・「総工会」ゼネスト組織部長に命じて、擬装兵部隊による南京租界の外国人襲撃を仕掛けた、それによって譚は、①イギリスの外交を更に撤退させ、②国民党軍を擬装した共産兵が引き起こす英・中摩擦によって、南京における蒋介石の政治的足場を崩壊させよう、と考えた。

驚愕した列強は、上海の沖に、日本艦一四隻、米国一三隻、英国八隻、フランス三隻、イタリア一隻、ポルトガル及びオランダ一隻づつ等、計四一隻を終結させ、また、河江を含めた中国領海には、百七一隻の外国船を浮かべて中国を威嚇した⁽⁸⁾。

一方二七年三月二七日付けソ連共産党機関紙『プラウダ』は、「南京砲撃に関するコミンテルン執行委員会の檄（三月二七日）」を報じた。それは、「第一次南京事件」を、次の様に総括した。

「退却した山東軍が即ち、外国の反革命の同盟者であり、途方に暮れた中国国内の死刑執行人（即ち、山東軍が犯人であるという意）が発砲したのだということを彼ら（英米帝国主義列強）は十分知っている。この血と泥にまみれたデマは、自分自身の非行を隠蔽し……」、また、「彼らは大砲を以って南京の数千人の平和な住民を射殺した。彼らは何十年何百年もかかって出来たものを焼き尽くした。……・帝国主義の略奪兵どもによって計画的に行われたこの虐殺を、英米軍司令部は新しい前代未聞の、恥知らずな嘘八百で欺瞞しようとして企んでいる」。

ボロージンは、漢口政府において、一気に「武装による平和」政策を鮮明化しようとしたが、二七年六月一五日、コミンテルン派遣委員・M・N・ロイ（インド共産党員）は何を思ったか、コミンテルンの内密の「農民武装指令」（中国共産党向け）を汪兆銘に内示してしまい、事態は急展開する。

武漢政府の武力基盤であった唐生智が「長沙清党」に呼応し、右傾化を鮮明にする姿を取ったのは、二七年五月二五日のことであった⁽⁹⁾。同日、武漢政府救党臨時弁公処は、長沙において共産党員が指導する「プロレタリア運動」（27・5中共五全大会）なるものが、北伐将士の家族にいたずらに土豪劣紳の罪名を被せ、財産を強奪する活動を展開して

いる、と告発している。

汪兆銘は、ロイのこの突発行為によって、コミンテルンに対する決定的な不信感を抱いた。また、カラハンを通じてモスクワ政治局を信頼していた蒋介石は、モスクワとの絆がとりわけ深いと見られた馮玉祥との対決姿勢を鮮明にした。これより先に、前二六年五月二五日、蒋介石は「党務整理案」を提出し、「党高級幹部の三分の一以上を共産党は執行委員を送り出す事が出来ない、また、中央機関の部長になる事が出来ない」との規定を党規約に盛り込ませていた。

これに先んじて、二七年三月二七日、武漢政府中央軍事委員会は、鄧演達（共）が取り仕切る総政治部を、「中央軍事委員会」の隷下に収めた。同四月七日、漢口政府は南京及び上海から北京を目指す北伐軍の総司令を發表した。即ち、蒋介石を第一軍団総司令に任命し、片や、西部・山西省で情勢を觀望していた馮玉祥を、漢口政府は第二軍団の総司令に任命したのである。これは蒋介石の軍事専権を、二分の一に削減する手段であることは紛れも無かった。馮玉祥はこの新編成によれば京漢線を利用することによって、津浦線を利用して北上する蒋介石より先に、北京を突けるチャンスが開けるかも知れなかった。

また、蒋介石が軍隊を東方に展開している間隙を縫って、漢口政府は漢口から南京に暫定首都を移転する、と發表した。これも、蒋介石の存在を、国民政府文官支配制の下に置こうとする、漢口政府の強い意図を示すものであったと言える。

一方、北方では、二七年四月六日、張作霖による在北京ソ連大使館搜索に際して李大釗が逮捕され、刑死するという事件が起きた。この事件によって、中国共産党の「陳独秀、李大釗、譚中山」体制の鼎の一本足が折れたのであった。

二七年五月一日付け『プラウダ』は、「二五人の中国共産党員の処刑に関するコミンテルン執行委員会の檄（五月一日）」を載せた。「世界帝国主義に傭われた死刑執行人、血に飢えた中国の絞刑吏、將軍張作霖は、帝国主義者の意志を遂行して北京の外交団居留区域で逮捕した中国共産党の創建者李大釗をはじめとする二五人の中国共産党員に残忍極まりない殺戮を加えた」、と論評した。

前四月一七日、漢口政府は布告を以って蒋介石の全ての職位を剥奪する措置を取っていた。これは明らかに、蒋介石が上海で起こした所謂「四・一二（反共）クーデター」を、押し潰そうとする対抗的措置であった。

ここで、「四・一二」事件迄の上海ゼネスト情勢の推移に、もう一度話の焦点を戻そう。二六年十一月二六日、孫伝芳が南昌で敗退したのを見て、上海の労働運動は益々軍閥に対する攻撃姿勢を顕にした。その様な攻撃性は、二六年の「五・三〇事件」一周年の日から続いて来たものであった。二七年二月一九日、北伐軍の杭州占領と同時に、上海労働者は国民革命軍を誘導する目的で大ゼネストに突入し（上海大企業のみでも四九団体、八万五千人が参加⁽¹⁰⁾）、約三六万人が参加した。

ゼネストの先頭に立った「上海総工会」（赤色労働組合インターナショナル「プロフィンテルン」に参加）は、最初はゼネストを三日間に限定し、かつ、政治ストであることを

標榜したので、初めの内はゼネストは経済界へ影響するところは少なかったが、この情勢に驚いた列国が、軍隊と、（上海）工部局の出兵、及び（上海）警察の動員に踏み切ったことが事態を著しく緊張させた⁽¹¹⁾。

二七年三月一九日、上海総工会は、国民革命軍先鋒隊（便衣隊）が租界外各处中国側警察署を占領したことをきっかけとして、第二次大「ゼネスト」を実施した（五日間で示威の後収束した：第一次く2・19のスローガンは「孫伝芳を排撃せよ」：四日間、三〇万）。

上海では、一五八組合の労組代表三〇〇人、参加労働者数八〇万を、李立三が組織部長として指揮を取った。上海の騒乱は、南京への進出を視野に入れていた。この「労働階級闘争戦線」路線を、翌五月二〇日～二六日迄漢口で開かれた「太平洋労働会議」が国際的に支持した（当初は、五月一日に広東で開催する予定であった）。同会議の出席者は、汪兆銘、陳公博、李立三、蘇兆徴、邓中夏、トム・マン（英）、ジャック・ドリオ（仏）、ブラウダー（米）、ロゾフスキー（ソ）等であった。

二七年四月一二日、上海労働者は市民大会を開催し、大衆は、上海外国租界に隣接する闸北から上海市司令部に向けて請願大行進を開始した。ところが、宝山路において彼らは、機関銃による一斉掃射を受けた。白崇禧を戒厳責任者とする進駐「蒋介石軍」が、大衆・労働者の後方支援に当たっていた「上海総工会武装糾察隊」（項英指揮）を銃撃し、多数の死傷者を産み出したのであった。「四・一二クーデター」である。

上海ゼネスト爆発の動きは、直ちに南京、無錫、寧波、杭州、そして二日後には、広東に飛び火した。一五日には広東で、上海に劣らぬ流血事件が起こった。広東事件は、武漢政府と蒋介石がともに、政府行政の運転資金として使う広東中国中央銀行の銀塊を手に入れようと、広東の覇権を争ったものであった。

武漢国民政府は、蒋介石をはじめ上の「四・一二クーデター」の企てに係わったと見なされる容疑者の職務を剥奪した。他方、武漢政府が重要地盤とする湖北省では、農民協会の会員数が、二七年春には八〇万人に膨れ上がっていた⁽¹²⁾。この農村急進革命の傾向に恐れをなして、早くも五月二日（馬日）、夏斗演軍の反乱が起こったが、六月一〇日、冯玉祥の斡旋（郑州会議）で、汪兆銘、孫科、唐生智の武漢派と、張發奎、譚延恺の南京派が会合し、政権統一に向けての基本的了解が出来た。

二七年四月一五日付け『プラウダ』は、「蒋介石の反革命的クーデターに関するコミンテルン執行委員会の檄（四月一四日）」と題する「四・一二上海事件」に関するコミンテルンの総括を、次の様に伝えた。「蒋介石は上海にクーデターを行い、（プロレタリアートの）上海政府を解散した。彼の腹心の將軍どもは労働者の自衛軍を武装解除し、外国の暴虐者の命によって何百人のプロレタリアの婦人と子供を射殺した。死刑執行人に対する最大の憤怒と一切の憎悪を挙げて、我々は蒋介石を革命の裏切り者、帝国主義的暴虐者の共犯、革命的国民党の敵、労働運動の敵、コミンテルンの敵と断罪する」。

漢口政府と完全対決する姿勢を鮮明化した蒋介石は、四月一八日、南京政府の樹立と、「清党」を宣言した。しかしそれから四ヶ月後、漢口政府衛戍司令部は、上に既に述べた

様に、同六月一五日、ロイの「密書公開事件」（M・N・ロイがコミンテルンの作戦指令を汪兆銘に見せたのである。その内容の中心は、①土地国有の即時実行と、②中国共産党員2万、労農5万の武装であり、北伐が北京に到達した前後に、共産党と国民党左派で国民党全体を転覆させる計画と、また他に、外蒙古はおろか新疆、チベットについてもソ連勢力圏に編入することを中国政府に了承させる⁽¹³⁾、という内容もあった、と推測される）が露見したことによって、一気に反対方向（右寄り）に振れ戻るに至った。

八月五日に、漢口政府は内部の共産党を一斉に逮捕したのであった。総工会委員長・向忠発（共）は地下に潜行した。M・N・ロイは遂に中国を去った。コミンテルンが次に中国に送り込んだのは、大きなミソをつけてしまったインド人共産党員ロイに代えて、今度は、スターリンの懐刀として知られたグルジア人のロミナーゼであった。しかしその後、コミンテルンの「農民武装革命」路線は、二七年一二月一日に誕生した「広東コンミュン」が、僅か三日で潰れてしまった後に、行き詰まったままになる。

国民政府は、「広東コンミュン事件」を口実として反共宣伝を打っただけではなく、ソヴィエト領事館が革命軍を保護したという理由によってソヴィエト領事館を襲撃し、五名の館員が殺され、一二月一五日、中（国民党武漢派は、九月四日、南京政府と合体）・ソ関係は国交断絶した。

「労働運動」の状況については、二七年四月に漢口で開かれた中国共産党第五回大会に引用された数字から窺えば、「（共産党機関紙）『響導』の発行部数が七千部から五万部に増加し、二六年五月一日には一二〇万人の労働者を組織していた労働組合は、一九二七年五月一日には約二八五万人を擁するに至った」事実があった。しかし、「上海大ゼネスト」の可能性は、蒋介石による武力弾圧の前に脆くも崩れた。

二七年六月一九日から二八日にわたり漢口で開催された「第四次全国労働大会」は、蒋介石が引き起こした「四・一二クーデター」『後』に開催された、「中華全国総工会」が態度を決定するための会議であった、と考えることが出来る。同会議は、汪兆銘、陳独秀、李立三間の「政策調整」を目的とした。その結末は、六月五日のボロージン追放、及び七月五日武漢政府「反共会議」、そして八月八日、国民党武漢派による「共産党員逮捕令」となった。

北伐（第二次北伐）直前においては、農民組合員数は約百万人程であり、その内六五万人は広東省内にいたのであった。その他は、湖南、湖北、江西、広西各省に散在していた。ところが、二七年春頃には、農民協会員数は五百万人に達した⁽¹⁴⁾。その主な省は、湖南二百万人、広東百万人、湖北八〇万人、江西三〇万人等であった。

譚平山の革命指導は、上海大ゼネスト指令から、八月二日、南昌共産党の設立（譚平山、郭沫若など）に至る。しかしながら、譚中山の中国共産党内でのポジションは、飽く迄もモスクワから指示を受けることによって成立していた。「第二次上海ゼネスト」を契機として、李立三・上海総工会連合ゼネスト組織部長の存在感が傑出し、陳独秀・譚中山との差が開いた。

ミフ（ Mif Pavel Aleksandrovich 1899-1939 : ウクライナ生まれのユダヤ人・コミンテルン派遣顧問 ）は、勿論スターリンの意を帯してのことであろうか、「南昌蜂起」の政治的意義を絶賛した。すなわちミフは言っている。「一九二七年八月の南昌反乱と共産党員葉挺及び左翼国民党員賀竜（この時代に中国共産党に入党し、現在（当時）は紅軍司令官の一人）指揮下の最も戦闘的な部隊が行った汕頭への進軍は、……武漢の左翼国民党指導者の裏切り後における、革命の新しい地域的拠点と新しい武力を創設しようとの企図であった⁽¹⁵⁾」。

上海ストの経験を経て、共産党の都市労働運動は厚い壁に突き当たった。実体的な武力を有しない限り、中国共産党が政治イニシアチブを奪えないことを、コミンテルンはまざまざと思い知ったのであった。

南昌（江西省の政治・経済の中心地）蜂起は、武漢派軍隊が人力車夫を虐殺したことをきっかけに二七年「八月一日」に始まったものと言われている。南昌に「革命委員会」を作った（中国共産党史上最も重要な事件の一つである）委員の顔ぶれは、譚中山、宋慶齡、恽代英、李立三、張国涛、周恩来、賀竜、朱徳、呉玉章、郭沫若、邓演達などの二五人であったと言われている。

しかし八月五日、賀竜、葉挺軍は早々と、南昌から撤退して広東へ向かってしまった⁽¹⁶⁾（11・17 広東省海豊・陸豊県で彭湃は、賀・葉軍の援助を得、海陸豊ソヴィエト政府を樹立した。中国で最初のソヴィエト政府建設であり、翌二八年二月まで続いた）。その後、武装力欠いた南昌蜂起は、あっけなく崩れ去った。

賀竜、葉挺軍の奇妙な行動は、背後にコミンテルンの統一的な軍事企画と資金醸出を推察させる。工作に最適のポジションにいた駐日ソ連大使・ベセドフスキーの動向が注目されるのである。

顧順章一家の暗殺を指揮し上海共産党（ビューロー）中に台頭した周恩来は、二七年五月、共産党第五次大会で中央軍事部長、中央軍事委員会書記の三職を兼任し、共産党中央で唯一の軍事指導者になった⁽¹⁷⁾。その後周恩来の率いる中央軍事指導部は、劉伯承、賀竜、葉挺、朱徳、周仁弟による参謀団も形成した。コミンテルン上海ビューローは、かくして、周恩来の完全支配下に入った。他に、政治代表に、向忠発、李立三がモスクワから送り込まれている。

広東では、二七年一月中旬、張発奎（広東系）軍が李済深（広西系）を追い払い、加えて汪兆銘がちょうど南京に赴いて市内の警備がその分手薄になった隙を突いて、共産党員の張太雷が、一二月一日、労働者を組織して武装暴動を起こした。翌一二日、張は工農兵大会を開いて「ソヴィエト政府」を組織した（参加者、女子学生を含む七千人）。そして、同武力蜂起の最高指揮を取っていた人物こそ、共産党中央委当然委員兼中央軍事委書記・周恩来なのであった。

一四日、しかし、「広東ソヴィエト」は転覆消滅した。張太雷は戦死し、また同蜂起に係わった五千余名は銃殺刑に処された。ソ連総領事館は、コンミュンと関係ありとの嫌

疑をかけられ、同一五日、南京政府は対ソ国交を断絶を決断した。

さて、当時、南昌の公安局長は朱徳であったが、朱徳は自らこの暴動に参加したのであった。事前準備に密かに南昌に入った周恩来は、同地で朱徳と出会う⁽¹⁸⁾のである。雲南省出身の上級士官であった朱徳は、共産党系の資金でドイツに留学し、帰国後は南昌で、公安局長兼軍官学校校長になった。また、周恩来のパリ遊学時代の僚友、李立三、徐特立、聂荣臻等も続々南昌の地に集結した。加えて、なぜかまた、賀竜、葉挺の二部隊が南昌付近に一時駐屯した。中国共産党はこの時初めて、兩人を通じて、本格的な軍事力を手に入れることになったのであった。共産党が武装力と結合出来たその蜂起「決定日」（八月一日）は、後に社会主義中国期になってから、「建軍記念日」に定められることになった。

「左翼国民党員の配下でグズグズしていた共産党員ら（譚中山らを指す）は、広範な大衆と密接に連絡する事が出来ず……」⁽¹⁹⁾、とミフは譚平山を激しく罵り続けた。陳独秀とともに譚中山は、「上海ゼネスト」失敗の責任を問われなければならなかった。二人の共産党党籍剥奪（29・11）は決定済みになった。これはコミンテルンが周恩来を救おう、庇おうとする処置でもあった。周恩来の「武装路線」は、無傷（失敗を問われず）で、中国共産党の歴史上に「勝利」として残されることになったのであった。

2. 「八・七」九江会議から始まる周恩来「コミンテルン・極東ビューロー政権」の盛衰

九江（南昌の北方）における二七年「八・七」政治局拡大会議（同日、武漢政府でも、共産党本体が「中央緊急会議」を開催した。こちらの会議では、左派国民党と共産党武闘グループに批判が噴出した。：中央委員12名、候補委員3名が出席⁽¹⁹⁾）で、工農勢力の武装暴動という共産党の最高方針が決定されたが、その討議すべき具体的課題はまた別にあつた。それは、国民党内の左傾している既成軍事力を、いかにして共産党の傘下に収めるか？という本音の問題であった。共産党中央は南昌蜂起において、朱徳と賀竜の武力を取り込むことに成功した。朱徳という人物は、雲南のインテリ階級（地主？）出身で複雑な性格であったが、賀竜の方は、これから共産党が是非ともオルグすべきキャラクターを典型的に備えた軍人であった。即ち、「太平天国」的「世直し」感覚の庶民派の体質を賀竜は持っていた。

次に共産党が工夫すべき戦略は、恐らく次の二項目であつただろう。①生っ粋の軍人指導者（既成軍を所有する）にコミンテルンの共産主義思想をオルグする。②軍隊を共産党に所属（紅軍化）させ、かつ、共産党の「政治委員」を「指令員（官）」の上位的ポストに置く、という共産軍独特の「軍制」への改組を納得させる。

一方、南昌蜂起の後、各地に発生する農民暴動を前にして、共産党は「農村ソヴィエト」の建設を、革命運動の主流に切り替えて行くのである。つまり、湖南、湖北、江西、江蘇、広東各省にわたり、六〇余箇所に「農村ソヴィエト」を樹立する方向転換をした（二八年四月頃に、朱徳・毛沢東「紅軍」が建軍された）。次いで、二九年頃になると、江西省と

周辺各地に、続々と多くの（中華）「ソヴィエト区」が誕生した。兵の総数は七万五千、銃数は約五万挺であったと見積もられている⁽²⁰⁾。

陳独秀の「誤謬」については党内で徹底的な批判が下された。「急進主義を排除した」という罪名が陳と譚に貼られた。両人が党籍を剥奪された後、譚平山は、暫くの間、恐らくソ連に亡命したであろう、と推察されている。

瞿秋白⁽²¹⁾（党第三全大会以来中央委員会及び政治局委員）が代って書記長に就いた（瞿の次にコミンテルンは、向忠発を候補に準備するのである）。「八・七同志に告げる書」（九江会議決議）は激しい、譚平山への弾劾をまざまざと書き残している。

「譚平山（共産党のトップ〈光榮的総長〉として）の活動は土地革命に消極的であり、行き過ぎを共産党内に戒めた。土豪劣紳地主階級の農村政権を前に（譚平山は）沈黙を続けた」。「農政部、劳工部（以上を共産党、及び国民党左派が支配）と他の政府官僚機関を区別せず、数ヶ月間、工農痛苦の状況を軽減する法律を一本も通さなかった⁽²²⁾」。

しかし、逆にこの表現は裏返せば、譚平山が「擬装兵」を使用する巧みな攪乱工作の企画者であり、また、武漢国民党の政権内部で大いに信用を勝ち取り、国民党組織内部に、共産党フラクションを盛んに増殖させていた、と言う事実が分かる。

ちなみに、「八・一」南昌蜂起について、賀龍顧問のクチェンスキーは、指導の中心はやはり周恩来、李立三、瞿秋白の三人が担っていた、と述べている⁽²³⁾。クチェンスキーによれば、陳独秀の役割は飽く迄ミフの傀儡以下に過ぎなかった。

「広東蜂起」（27・9・25周恩来による汕頭蜂起が中心）は、それが瞬発的な一揆に終わったにもかかわらず、ミフ（スターリンの代弁者として振る舞った）によって高い評価を得ることになった。「二七年一二月一日、中国革命不変の兵器庫である広東では、二五年～二七年中国革命の後衛戦となった広東反乱が掲げた旗を、革命の新しい段階の旗として、—— ソヴィエトの旗を翻らせた」、とミフは敢えて「評価する」のであった。

コミンテルン路線が、次第に二八年二月第九回プレナム「中国問題」（スターリン、ブハーリン、李立三、向忠発報告）という「新たな政治路線」（武装蜂起支持）に切り替わって行くプロセスとこのミフの高い評価は、恐らく強い関係を持っていよう。

他方では、31・6向忠発が国民党官憲に逮捕、銃殺され、また、ヌーラン夫妻（コミンテルン駐中国代表）の逮捕等の事件が引き続いた。

中国共産党六全大会（1928・6・18～7・6：在モスクワ）の新路線は、コミンテルン第九回プレナム「中国問題」路線（ソヴィエト建設）が中国共産党指導部に伝達されたものを、中国共産党が（連絡状況の疎遠を理由として）自分流（二六年一二月毛沢東「土豪劣紳懲治暫行条令」及び、二七年毛沢東「七月決議」〈急進的土地没収政策〉の党公認⁽²⁴⁾）が中心）な理解で急進的に解釈し、受け入れたものであった。そしてしかし、党六全大会で決定した共産党指導体制は、向忠発・書記（委員長）、周恩来・組織部長（後、李維漢）、李立三・宣伝部長、潮文江・軍事部長（後、周恩来）、劉少奇・職工部長、彭湃・農民部長（後、羅綺園）、瞿秋白・駐ソ代表の陣容であった。私はこれを、周恩来「武

闘派」グループ、と名付けたい。言ってみれば、譚平山なき、譚平山路線なのである。

ところが三一年一月八日、上海において開催された党拡大四中全会へ李立三は自分の路線の誤謬を認める旨の「声明書」を寄せた（恐らく李立三は出席していず、欠席裁判であろう）。李立三時代はこうして終わりを告げたのであった。同四中全会決議では、「紅軍」へ向けたメッセージが多く採用されたことが目立った。その後、共産党第六期五中全会は、「江西中央中華ソヴィエト」二全大会党団に与える指令で「李立三路線の錯誤を修正し、土地革命の利益を雇農、貧農及び中農の手の中に返す」、「査田運動は、土地問題を徹底的に解決する武器である」と総括した⁽²⁵⁾。

三〇年一〇月、コミンテルン「李立三主義について中国共産党中央委員会に寄せるコミンテルン執行委員会の書簡」（『反対李立三主義』極東国立出版社、一九三一年）は、李立三主義を以下の様に総括した。「我々は李立三によって行われた、革命の武装勢力の驚くべき過大評価（労働者五〇〇万人、農民三〇〇〇万人、各都市において労働者衛兵、青年衛兵五〇〇万人等々）を評価しない。我々（コミンテルン・中共ビューローが、の意味）が、労働者の軍幹部を持ちかつ強固な党の骨格を持つ真正の労農紅軍をまだ所有しないことを、李立三は絶対に理解していない。……紅軍の社会構成は決して満足なものではない。多くの軍隊の人的構成の中では軍閥の軍隊の旧兵士が優勢である。富農が紅軍の中に入り込んでいる」。

一九三一年一月七日、江西省瑞金に中国共産党結党以来始めて独自の支配地域を共産党が確保した。中共「中央中華ソヴィエト政府」である。秦邦憲、周恩来が江西ソヴィエト区に乗り込んだのは、共産党の「李立三体制」が、ソ連留学生派（コミンテルン極東〈中共〉ビューローを形成、「二八1/2ヴォルシェビキ」と言われた）に対する弾劾の前に最終的に屈服した、三一年一月中共第六期四中全会（在上海）の直後であった。

周恩来は上海から中央（中華）ソヴィエト区に入り、南昌、広東両武装蜂起筆頭指導者の名声を纏って、中央総書記職に就いた。次にコミンテルン直系の秦邦憲が入山し、周恩来の地位に取って代った⁽²⁶⁾。

紅軍が蒋介石の第三次剿共戦を凌いでから、三一年一二月、中共中央（コミンテルン・極東〈中共〉ビューロー）は、党六期四中全会「以後」に党の正統的最高指導部を確立しようとしたが、「上海ビューロー革命軍事委員会」は、しかしながら、実体の無い組織であった。周恩来は、中央（中華）ソヴィエト（朱毛体制）の一五人の委員の中に、朱徳、毛沢東とともに、辛うじて名を連ねているに過ぎなかった⁽²⁷⁾。

毛沢東は、紅軍第一方面軍政治部主任の地位を周恩来のために譲らなければならなかった。江西・中央中華ソヴィエト区の指導体制の構成は、朱徳主席（1932・6総司令就任）の他は、周恩来、王稼祥が固めるようになった。三三年一〇月以降には、毛沢東には臨時政府主席の地位が僅かに確保されていただけで、人民委員会主席の座は、張聞天（洛甫）によって取って代られた⁽²⁸⁾。

三二年一二月「紅軍拡大会議」は、共産党第六期四中全会の政治中心として周恩来が、

同年二月一七日、毛沢東の肩書きから紅軍総前敵委員会書記職（すなわち、江西中華ソヴィエトの政治中心）を取り消し、共産党内部に凄まじい政治闘争を伏在させる。

その後、周恩来・毛沢東両者の拗れた党内関係の経緯（いきさつ）については、ここでは述べない。ただ、歴史的視野で通観すれば、貴州省「遵義会議」⁽²⁹⁾（35・1）において、周恩来・秦邦憲（博古）という旧・「極東ビューロー代表」系勢力は、毛沢東との党主導権争いに敗北し、自らが折れる（屈服する）ことで、決着を付けた（周恩来と張聞天は毛沢東の側近に立場を転じた）、と言うに留めよう。

3. 第二次南京戦における「正規戦」と「遊撃戦」の交錯

今日の時点から振り返ってみる時、二七年四月と、三七年末の二つの「南京戦」の政治環境の差として最も注目されるべきなのは、三七年八月二一日、ソ連が、ドミトリイ・ボゴモロフ・ソ連中華民国駐在特命全権大使と王笏恵（国民政府）間に「不可侵条約」を結んだことによって生じた「中・ソ新関係」であった（1932・12・12中ソ関係が回復）が、「中（漢口、重慶）・ソ関係」は、単に「不可侵」の状態に留まらず、歴史的に特別に重要な意味を持っていたことが、我々の前に改めて明らかになって来つつある。

上の条約関係に恐らくは「密約」として係わるであろう大きな二項目は、①ソ連義勇空軍の創設、と、②対中資金（武器援助が中心）援助であった。以下、それについて順次述べよう。三五年四月二九日には、スターリンはわざわざ使節を南京政府に送って、ソ連は新疆に対する野心を持たない、と宣言した。

第一について、一九三八年六月二一日付け『イズベスチヤ』を引用する。同紙は以下を報ずる。「（三八年）四月四日外務人民委員エム・エム・リトヴィノフを訪問した日本大使重光氏は、中国における最近の戦闘において、日本軍によりソヴィエトのものらしい飛行機が撃墜され、ソヴィエト飛行士が落下傘で降下し、日本人の捕虜となった旨声明した。重光氏は、ソ連邦の国家体制を考慮するならばこの事実は遺憾であり、ソヴィエト政府に対し特別の責任を課するものであると声明した」。この声明に対してリトヴィノフ（外務人民委員）は、「この様（抑留されたと日本人が称する某ロシア人飛行士の証言）なことは我々の感知しないところである」。また、「日本とソ連の関係を悪化させる目的で、あらゆる偽りの報道を作ることを本職とするもののみが考え出す事が出来るデマである」。

実はソ連は、義勇軍を装った空軍パイロットと飛行機を、西南ルートから盛んに中国に送り込んだ。ソ連空軍は、満足な空軍を持たない国民党政府の、漢口、重慶の上空防衛圏を圧倒的に席卷して行った。南京城に対して日本軍は激しい都市空爆を敢行したが、一方、特に日・ソ関係を配慮して、延安（陝西省、共産党の本拠地）に対する空爆は、ほとんど全く実行しなかったのであった。

毛沢東は、三九年一二月二一日、延安「スターリン六〇歳祝賀大会講話」⁽³⁰⁾において、コミンテルンが中国に与えた感謝すべき援助の順を、①飛行機、②大砲、③パイロット、④各戦区の軍事顧問、⑤借款、の順で掲げて感謝した。これは、制空圏の確保を延安共産

党が、どれだけ命綱と考えていたか、を良く物語っているだろう。

ソ連代理大使スメターニン（37・11・22張家口に察（チャハル）南、晋（山西）北、蒙古連盟の三自治政府による蒙疆連合委員会が成立。ボゴモロフ・ソ連駐華大使をスターリンが罷免）は、三八年六月一七日、日本の広州（広東）爆撃について、無防備都市を空爆することに、ソ連が絶対反対である旨を、堀内外務次官に激しく申し入れた（6・20タス通信）。この様なソ連外交は、ソ連に対する漢口政府、中国国民の信頼度を高め、それは跳ね返って、共産党の重慶政府に対する政治圧力を強めた。

第二の資金支援問題について、例えば、三八年九月一六日顧維鈞（外交部長）は国際連盟で日本に対する軍事制裁を各国に求めたが、各国は自主的経済制裁のみを承諾し、対日軍事制裁には総反対した。顧維鈞は、四面楚歌の絶望的状况を感じた⁽³¹⁾。

その様な苦境の渦中で、ソ連一国のみが対重慶政府アプローチを強固にした。三八年三月一日、一億五千万米ドル借款対中協定は、「漢口（移転政府）・参政会」に強烈な信頼感を与え、翌三九年六月一六日の「中（重慶：西南経済を基盤とする）・ソ通商条約」を生み出すのである⁽³²⁾。

さて、早くも三七年八月一四日、蒋介石は程潜（同日、「第三戦区」〈江西・江蘇〉総参謀長に任）を通じて、蔣の幕舎（南京大本営）に冯玉祥将軍（37・8・27中国大本営・総司令に任）を呼び出した。翌一五日、冯は直ちに蘇州城外にあった張自中將軍（上海・南京戦の最高司令官）の司令部を訪れている。

冯玉祥は「蔣・冯会談」では、抗日戦争の基本戦法が「正規戦主体」か、「ゲリラ戦導入」かの再度のやり取りがあった。冯玉祥の自伝『私の識っている蒋介石』（『我所認識的蒋介石』）によると、冯は蒋介石に「ゲリラ戦」（遊撃戦）の採用を進言した⁽³³⁾と書いている。冯玉祥の本心としては、「正規戦」オンリーでは、自軍（西北系）が徒に消耗戦に追い込まれることは目に見えていた。だが、蒋介石は冯玉祥の進言を退けて、飽く迄、中国軍が正規軍による戦闘方法を取ることに拘り続けたという。

それは何故だろうか？蒋介石の考えを忖度すれば、一旦各「戦区」（司令官はいずれも代表的な地方軍閥であった）にゲリラ戦を許可してしまえば、各軍閥は勢力温存の見地から、散發的な月夜のゲリラ夜襲（日本人は習慣的に、奇襲には暁を好む）しかやりたがらないだろう。

しかしながら、蒋介石がゲリラ戦への戦略転換を拒否した最大の理由は、もし中国の抗日戦争にゲリラ戦を導入することを許せば、元々ゲリラ戦主体の戦争に熟達している「合作」共産党軍に、蒋介石の直系軍（陳誠、何応欽、蔣鼎文、朱紹良、胡宗南、劉峙、賀国邦などが主力である）などは直ちに乗っ取られて、雲散霧消してしまう恐れがあった。ところが、結局、歴史では「第二次南京戦」で南京城、及び揚子江流域三角地帯（南京、上海、杭州）に残ったさ迷える残留直系軍は、得体の知れないゲリラ戦の混沌状況の中で、溶解させられてしまったのであった。

「ゲリラ部隊」（便衣軍を含む）の育成に早くから取り組んでいたのが共産党であった。

王明（陳紹禹）が、コミンテルン執行委員会第一三回総会（33・12）において、その存在を明かしている。王明（31 共産党第六期四中全会で共産党の最高指導権を握った一時期があった）は、三七年秋に国・共の「精誠団結」促進のためにモスクワから帰国し⁽³⁴⁾、共産党長江（揚子江）書記，統一戦線工作部長の任に就いた。「第二次南京戦」の舞台となる，揚子江流域三角地帯のオルグ工作のためであったろう。

王明は，コミンテルン執行委員会第一三回大会で，次の様に述べている。

「五個の新師団が（最近）創設され，その内三個の模範的師団が（中央ソヴィエト地区）（江西省）に創設された。この際二個師団は労働者と日雇い人（失業労働者）を以って『特別に』組織され，一個師団は共産青年同盟員を以って組織された。即ち，国際共産青年同盟師団である。これらの師団内の兵士の大部分は黨員または共産青年同盟員である。これらの模範的師団は中国の全紅軍の突撃部隊であり，鉄拳である。……」。

つまり，揚子江流域三角地帯の労働者と青年団は，三三年に既に，共産党に「組織化」されていた。

王明の説明に出て来る共産「ゲリラ部隊」について，波多野乾一の研究によれば，創建当時の紅軍は五ランク（紅軍，赤衛隊，遊撃隊（ゲリラ部隊），守備隊，少年先鋒隊）に序列付けられていた⁽³⁵⁾。赤衛隊は，原則的には地元から移動せず，通常は自分で田地を耕している。県軍事委員長が総隊長を兼任する。三一年一月二八日，「中華ソヴィエト共和国中央執行委員会」（主席・毛沢東，副主席・項英，張国焘）は，中国共産党の戦闘方法として，「パルチザン闘争（山岳ゲリラ）」を指令した⁽³⁶⁾。

遊撃（ゲリラ）隊の特徴は，移動しない赤衛隊と異なって，有事に出撃，移動することを義務づけられている。遊撃隊は普段は赤衛隊隊部の指揮下に服し，県の下「区」の行政単位で編成され，赤衛軍大隊長の指揮を受ける。

松井石根大将が陣頭指揮を執って戦った，37・12「（第二次）南京攻防戦」の舞台は，この共産軍「ゲリラ部隊」の本拠地（江西省）だったのであった。

「南京失陥」（37・12・13）直後から，共産党側は漢口政府（蒋介石）に対して，抗日戦の方式を「ゲリラ戦」戦主流に変更する様，執拗に迫った経緯がある。三八年一月一日，中国共産党中央執行委員会から周恩来，秦邦憲，陳紹禹（王明）らが公式に，武装民衆発動の自由を国民政府が認めるよう，蒋介石に強く申し入れた。一二月一日，周恩来は『大公報』（国民党系）記者に対して，「我々は政治工作を益々強化し，遊撃（ゲリラ）区に特に重点を置いて，日本軍占領区域全部を『遊撃区』としたい」，と語る。

遂に蒋介石は，上の共産党の要求に屈服した，と見られる。やがて蔣は，西安に中央，共産，山西の各軍首脳部を招集し，①戦局が西北に移った場合には，西北保衛の責任を毛沢東に託し，②国民政府は共産党に軍費，兵器を提供すること，③共産党の手によって民衆を武装させ，その指導方針に，国民党は一切反対しないこと，等を決議した，とされる。

これは，「抗日戦争」が，「蒋介石の戦争（正規戦）」から「毛沢東の戦争（ゲリラ戦）」にシフトした，「転回点」を意味していよう。つまり，「第二次南京戦」の性格は歴史的

に、中国軍の戦闘方法が「正規戦」から「ゲリラ戦」に公式転換する分岐点に位置しているのである。十一月三日近衛「第二次声明」（蒋介石政府を相手とせず、を一部修正）後、日本では二ヶ月ばかりして第一次近衛内閣が辞職し、次の平沼内閣（39・1・5組閣）の時に、汪兆銘の来朝があった。

一方目を転じれば、三八年六月一六日、漢口・国民政府中央常務委員会は「参政会」委員二〇〇名を指名発表した。汪兆銘と張伯苓（第三党、容共派）が正副議長に就任した。

共産党側からは、毛沢東、秦邦憲、王明（陳紹禹）林祖涵（陝甘寧辺区政府主席）、董必武、呉玉章、邓穎超（周恩来の妻）の七人が選出された。同年一月一日に蒋介石が、「首都・南京失陥」の責めを負わされて行政院院長を辞職（孔祥熙が後任）した以後、漢口国民政府の「本体」に共産党は著しく食い込んだのであった。

片や、三八年十一月一五日に延安で開かれた共産党拡大六中全会は、漢口政府（38・10・27武漢三鎮陥落）を構成して来た国・共両党が、全ての（重慶）「政府委員会」において、各級共同（国・共）委員会制を採用せよと国民党に提案することを決議した。

共産党の要求は、翌三九年一月二五日の重慶国民党第五期五中全会本会議で、「中央党政委員会」の構成について、国民党側から応諾された（38・12・20汪兆銘、重慶を脱出）。同会議によって、中央党政委員会は「中央拡大戦地党政委員会」と改称され、同委員の割り当て数は、国民党五名、共産党三名、その他抗日諸党派、第三党、救国連合会派及び国家主義青年党から二～三名とされた。

これは一見すると、国民党が未だ重慶政権の支配権を握っている、かの外貌を呈していたのであったが、しかし我々は、「その他」勢力の存在に、必ず注目すべきである。例えば、先に三八年六月一六日、「参政会選挙」で二〇〇名の参政会員が選出された際、第三党選出の代表として譚平山が入っている。譚平山は一九三九年に共産党籍を回復された（回復した世話人は、譚の失脚の経緯から考えて、周恩来であろう）⁽³⁷⁾。つまり、「その他勢力」は、多分に譚平山に支配されていた、と考えるべきである。蒋介石国民政府「総裁」（38・4・1）の面子を配慮した形式を取っているが、重慶の国・共勢力比はもはや五分と五分であった。しかもそれに加えて、重慶政府はソ連の資金と武器に依存して存立し、「中央拡大戦地党政委員会」がそれを分配して国・共が生き延びていた。

4. 南京戦域と周恩来の責任指導

溯って、三三年七月、張学良が「東北喪失」の責任を取る形で中央政府から引責自認（27・7・2：学良は河南・湖北・安徽剿匪副総司令に任じられた）した後、唐生智が、宋哲元（チャハル、河北）と独立系・閻錫山（山西）の両雄を緩やかに捌きながら、江（揚子江：長江）北を概ね支配したのであった。しかしその唐生智が、蒋介石に「南京失陥」（37・12・13）の責を一人負わされた形で失脚した。

華北（中国北半）「西北系」は、閻錫山（山西）が三七年十一月、省都・太原の陥落によって没落した。宋哲元下野。合わせて、山東（主席）の韓復榘も三八年一月、蒋介石に

漢口に呼び付けられて、戦場離脱の罪を被せられて処刑された。

「南京攻略戦」期に華北（中国北半）情勢を眺めて見よう。日本軍は北平（京）、太原（チャハル、熱河、北京、天津経済の中心）、及び山東半島の「三点」の「点と線（兵站）」を制圧した。しかし、華北全農村地帯の「夜」についてはどうだろうか？

国民政府軍「第二戦区（太原）」閻錫山（総兵力18師2旅：15万）は、三七年一月に勢力失墜してしまい、賀竜集団（共産軍：西北軍区、陝甘寧辺区（延安）共産党根拠地の北方を固める）に呑み込まれた。国民政府軍「第八戦区（蘭州：内蒙古所管）」朱紹良（総兵力36師2旅：25万）が奥地に孤立していた。

国民政府軍「冀（河北）察（チャハル）戦区」（衛立煌、5・5万）、及び「魯（山東）蘇（江蘇）戦区」（于学忠、7万）は日本軍が全ての要所に貼りついており、「虚構」（軍配置図の図上だけの戦区）の戦区である。「夜」はそれぞれ、聶榮臻集団、徐向前集団が支配していた。ちなみに、衛立煌將軍の主務は、国民政府軍「第一戦区（河南省洛陽）」の保衛であった。つまり、中国北半の「夜」は、共産軍（第一八集團軍、別名、八路軍）の賀竜、聶榮臻（冀西軍区）、劉伯承（冀南軍区）、そして徐向前が制圧していた。

さて、問題の華中の軍事環境である。蒋介石は唐の旧支配地（西北：両湖中心）を、新首都に狙っていた。そのため、蒋介石の華中戦域での最重要軍事配置は、「第五戦区（湖北省・老河口（光化）」（李宗仁、総兵力中央軍11師、地方軍35師：36万）であったが、場所があまりにも引っ込んでいて、日本の南京攻略軍とは会戦し難かった。

「第二次上海戦」以後、中国軍側では、誰が日本軍と戦ったのだろうか？件の江西省管轄は、国民政府軍「第九戦区（長沙）」（薛岳、二三万兵力）か、同「第三戦区（江西、安徽、福建）」顧祝同（総兵力二三万）であったろうが、先に述べた様に、薛岳將軍は、早くも戦場から逃亡して消えていた。また、顧祝同が、終始動かなかったことについても前述した。顧の軍本営は浙江省金華であり、そもそも南京を防備するには適していなかった。ちなみに、国民政府軍の中で最強の陳誠軍の所在地は、「第六戦区（四川省・黔江）」（総兵力二三万）で、遥かな遠隔地であった。

そうすると、「南京攻略戦」の前後に日本軍と「継続戦闘」を戦った中国国民政府（漢口、重慶）軍の軍事本体は、揚子江三角地域（南京、上海、杭州）の「戦場」には、存在していなかった、と言う歴史的事実に、我々は啞然として気が付かざるを得ないではないか！ならば、「南京攻防（日本軍にとっては攻略）戦」とは、歴史的に、一体どの様な戦場環境だったのだろうか？

江西省は、所謂「軍閥抗争時代」には李烈鈞、朱培徳が伝統的に支配する地であった。南京失守後、南昌（江西省）に蒋介石が大本営を移してふんばっていると、公には発表されていた。安徽、江西、浙江を中心とする山岳地帯には、日本軍の「南京－上海枢軸」支配を包囲する、蒋介石軍の反撃大基地が構築されている、と中国国民は、皆、虚説を信じた。ところが実際には、同地域を覆う軍事拠点・蚌阜（安徽省）は、実は、新編四軍（華中共産軍）の本拠地なのであった！

その後、四〇年「七月提案」を国民党が承認したことを受けて⁽³⁸⁾、共産軍は、三ヶ師「四万五千体制」から、正規軍三軍六ヶ師、予備団（連隊）五ヶ団及び新（編）四軍二ヶ師に拡大再編され、総兵力二〇万人体制を擁する大勢力に成長した。

また、同年「八月対案」（対国民党要求）では、「華北五省を一八集團軍及び新四軍の作戦地区とし、右区域以外の国民党軍との作戦（展開）分界線については、別に定める。また、共産軍に対する待遇給与を国民党軍と同等にし⁽³⁹⁾……」，などと共産党は主張した。

先に三七年九月二〇日、蒋介石は「国防政治委員会」制を、国民党政府軍の規律監視に導入した。同委員会は、国民（党）政府正規軍内に、ソ連のチェ・カー、KGB を模した様な、一種の憲兵組織を作ったのである。同委員会の委員長（軍事執行総監権限を行使）は、何と毛沢東（共），副委員長は陳果夫（国：親ソ派，「江蘇保安団」60万を組織⁽⁴⁰⁾する）であった。委員数は一五〇名である。蒋介石は、腹心中の腹心・陳果夫を毛沢東に貼りつけてチェックを効かせれば、毛を十分看視出来る、と安易に考えていた。

もう片方で、「南京攻防戦」時期に国・共間の連絡事務を一貫して責任担当していた「合同」政府（国・共）共産側代表者は、周恩来であった。周恩来はまた、三八年一月から、「国防軍事委員会」政治部（「国防政治委員会」を改組？）副部長に就任した。なお、同政治部の部長は陳誠⁽⁴¹⁾であった（蒋介石が毛沢東を更迭し、陳誠 — 蒋介石の異母弟？を周恩来の上司（看視役）に就けた、と言う含意がある）。

周恩来は、国父・孫文が率いた広東軍政府時代に、黄埔軍官学校（校長・蒋介石）政治部代理主任、政治訓練班主任、第一軍政治部主任、東江行政委員、高級政治訓練班主任と、輝かしい要職を次々にこなした人物として広く知られていた。

華北抗日戦域が、共産軍（第一八集團軍，別名八路軍）の支配下にほぼ帰していたことは先に述べた。朱徳がその中心にいた。蒋介石は只、「西北軍閥」程潜を「合同軍」副総司令官に就けて、形式ばかりのチェックをさせていた、と見られる。

華中戦域の「夜」は、新編四軍（華中共産紅軍，別名・葉挺軍）の支配地であった。国・共「合同」国民政府軍「南昌大本營」の実際の最高司令官は、事実上、国・共連絡係・周恩来（補佐、葉劍英）であった。実働部隊は、葉挺部隊と項英の両部隊である。

周恩来が、二七年、南昌蜂起、広東蜂起の首謀者であったことは、共産党歴史に、「闘争勝利の記録」とはっきり刻まれた。周恩来は李立三が失脚した後、中国共産党きつての輝かしい「武闘派」代表であった。華北での共産軍の、国民党軍に対する圧倒的優勢（朱徳が中心）を背景に、周恩来が華中で戦事工作イニシアチブを掌握した。

5. 「幻（まぼろし）軍」の再出現？

一九三八年一〇月一三日『中央日報』（重慶国民政府機関紙）には、上海郊外に駐留する占領日本軍が、正体不明の「中国遊撃隊」なる「便衣部隊」に襲撃された事件を報じている。しかし、奇妙なことに、それがどこの所属の軍隊であるか？重慶中央でも皆目掴み

きれない、と、同国民（党）政府機関報自身が困惑して報じていた。

この記事は、歴史的に「分析サンプル」として大変重要なのである。同襲撃事件には、国民（党）政府（重慶）の指揮・命令系統にない中国軍隊の存在が典型的に現れている。言わば「幻の軍隊」であった。

三七年一〇月一四日、湘（湖南）、贛（江西）、閩（福建）、鄂（湖北）、豫（河南）皖（安徽）、粵（広東）紅軍が、新編第四軍（新四軍と略称）に改組された。同軍は、重慶政府「（国防）軍事委員会」新四軍分会の所属⁽⁴²⁾になった。翌三八年一一月、同「分局」は、中共中央・東南局に改称された。（同日、華北で日本軍が綏遠を占領した）。

三八年一一月と言うのは、華中戦域において、「虚構」の看板であった南昌・大本営が役割りを終え、共産党が、その華中戦域・（実質）本営を、重慶中央の許可も得て「中共中央・東南局」として名乗った、ということだろう。

新編四軍は創設以来周恩来の斡旋によって、国民（党）政府から、軍費（もともとはソ連から蒋介石への借金だが）の支給を受ける（それは41初「皖南事件」で停止になった）資格を取得した。この取り決めは、周恩来、王明、葉挺が、南京と漢口で、蒋介石と直接交渉した上でまとめたものである。

「新四軍」の展開地域は、揚子江（長江）下流域の「（南）京・沪（上海）・杭（州）」三角地帯に重なっている。同軍は、形式的には中央「（国防）軍事委員会」を通じて戦闘指示を受ける。それは、系統的には陳誠・武漢衛戍区総司令（国）の指揮を仰ぐ、ということであり、実際「日・中」戦場では、顧祝同「第三戦区」副司令官（国）の直接指揮の下に「合同」戦闘する、ということであった。ところが、共産党は新四軍中に、国民党の軍事参謀が入って来ることを執拗に排撃し、独自戦闘方式を徹底したのであった。

他方で、三七年八月二七日、張家口（内蒙古）が陥落していた。一〇月二六日には、上海が失陥した。また一一月九日、太原（山西省：閻錫山）が失守し続いた。華北の戦域が総崩れする状況下で、同三七年一一月一二日、毛沢東は、延安・共産党根拠地に党「活動分子会議」を開催し、その席上で、我が共産軍は「国民党が主張する『正規戦』を終了し、今後は中国共産党が中心になって、抗日『遊撃（ゲリラ）戦』を主要な戦いとして遂行しなければならない」⁽⁴³⁾、と主張した。この主張は、毛が、先に八月二五日に開催された洛川・政治局拡大会議での主張を繰り返したものであった⁽⁴⁴⁾。

つまり、共産軍による抗日遊撃（ゲリラ）戦は華北戦域においても、そして又、華中戦域においても、少なくとも、日・中「南京戦」直前に三七年一一月一二日から、毛沢東によって指示が下された、と我々は確認することが出来るのである。本稿では、「南京戦」との係わりから、史的考察の焦点を華中戦域の考察に絞ることにしよう。

「新四軍」の総指揮は葉挺・司令官の任であった。副総司令官は項英であった（項英は同時に新編四軍「分局」書記〈つまり、延安・共産党（周恩来）とのパイプ役を担った〉であった）。葉挺が捕縛された後は、同地位を陳毅が引き継ぐことになる。

司令官・葉挺は保定軍校の出身であった。国民党生え抜き将官としての軍歴をスタート

させた。葉挺は、蒋介石の北伐に輝かしく参加した途上、国民革命軍「独立連隊」（鉄軍の異名）の連隊長を務めた。その後国民党からモスクワ東方共産主義者労働大学及び赤軍大学へ派遣されて留学した。国民党内では、葉挺は将来を囑望された軍幹部候補の代表格であった。ところが葉挺は、二八年、共産党の「広州起義」に参加した。葉挺は、四一年初、「皖（安徽）南事件」（国民党軍と共産軍の衝突事件：第五次剿共戦の再開戦の性格があった）で国民党軍によって捕縛され（1・14）、拘禁処分に処された。四六年三月四日、葉挺は出獄を許され、この時葉挺ははじめて共産党に入党したのであった⁽⁴⁵⁾。

二八年以降、葉挺が指揮を執る華中紅軍は、賀竜の華中紅軍とともに、華中では隠れもない二大勢力であった。「葉・賀軍」として世に広く知られている。成立も発展史も別系統の江西・朱徳軍（朱・毛軍）の軍勢（規模2万）より、遥かに規模が上回っていた葉挺軍は、「大西遷」（35）には同行せず、華中領域にそのまま留まった。四六年四月八日、葉挺は赦免を受けて拘禁地の重慶から延安に帰還しようとした途中に、飛行機事故に遭遇し、山西省上空で墜落死（秦邦憲も同機に搭乗していた）を遂げた。

一方、項英が二七年「上海大ゼネスト」で工人糾殺隊長であったことについては前述した。二八年、項英はソ連共産党に入党した。三七年八月、項英は延安入りし、八路軍延安総部副参謀長に任じられた。三八年、項英は共産党「長江局」組織部長。後、同一一月、「東南局」に改称されてから同書記であった。「陝甘寧辺区」党委宣伝部長。四三年、項英は謀殺された、と記録されている。

新四軍の編成は、四支隊（二旅四連隊）制であった、と一応判断される（日・中双方の史料には、支隊数が多い場合があるが、共産党が国民政府に軍費を請求したリストによる）。構成は、第一支隊・陳毅指揮、第二支隊・張鼎丞指揮、第三支隊・張雲逸指揮、第四支隊・高敬亭指揮（全軍1万3千）であった。この中で、第四支隊の高敬亭部隊は、公然と「遊撃（ゲリラ）部隊」（当然、便衣兵〈戦場で一般市民を装うが実は正規兵〉である）であることを名乗っていた⁽⁴⁶⁾。

共産党の公式史料は、三八年五月四日、蒋介石が新編四軍に対して、日本軍の正面からでなく背後からゲリラ戦を仕掛けるように命令を出した、と記録している。我々は共産党の史料に基づいて、蒋介石が毛沢東の三七年「11・12」指示（抗日ゲリラ攻撃）を、国民（党）政府軍の公式作戦として、三八年五月に認許した事実を確認出来る。

毛沢東はその前に三八年二月一四日に、南京戦域に駐留する日本軍に向けて抗日ゲリラ軍を「集中」せよ、と項英宛てに「具体的」に指示を出したのであった。前三七年暮れ一二月一〇日（日本軍の南京入城の一週間後）付け、「江浙遊撃戦争に注意すべき事項」文書⁽⁴⁷⁾は、新編四軍の「南京攻防戦」に係わる作戦を詳細に描出している。同文書は、周恩来及び博古（秦邦憲）から、任弼時（八路軍政治部主任）と葉劍英（八路軍南京弁事処代表）に宛てたものである。なお、葉劍英は周恩来の手足であり、延安・共産党本部から「新編四軍」に作戦内容を伝える役務であった。

同連絡文の中で周恩来は、延安「新四軍分局」代表（揚子江流域戦域で毛沢東の代理）

の立場で、葉挺の「戦闘行動」（朱・毛紅軍と、江南土着の葉挺紅軍とは、成立の根、成長の過程が別々であった）が歯止めが効かない、と困惑と苛立ちの感情を打ち明けている。同文書は我々に、「揚子江下流三角地帯」の、どの様な戦況を伝えているだろうか？

- ①葉挺・新四軍が（国民党の）「江浙軍事委員会」（中共中央新四軍分局）と円滑に連絡せず、「独特」の作戦を行っていること。
- ②延安（毛沢東）が「事後的」に国民党（蒋介石）政府に、葉挺軍の作戦行動を諒承させなければならなくなっていること（「統一戦線」〈合作〉を維持する必要上）。

以上を、我々は判断出来るのである。

三八年一〇月二五日、武漢が陥落した。同年末に、国民党（蒋介石）軍は、新編四軍（葉挺、項英）を「第三戦区（江西、浙江、安徽）」（顧祝同）から揚子江（長江）以北の「魯（山東）・（江）蘇戦区」（于学忠）へ追い出す「集中作戦」を企てた。その作戦の中間的結末は、四一年初「皖（安徽）南事件」で葉挺の捕縛に至るのであった。

他方共産党は、三七年一〇月二三日に山西省・五台地区に「晋（山西）察（チャハル）冀（河北）抗日根拠地」を建設し⁽⁴⁸⁾、「南下」に拍車を掛けた。また華北から、八路軍山東縦隊（洪澤・総指揮）、及び一一五師東進隊（陳光・総指揮）も次々に南下、或いは東進し、「（南）京・沪（上海）・杭（州）」三角地帯へ国民（党）軍包囲網を狭め、絞って行った。

新編四軍が、華中の戦略拠点・揚子江「三角地帯」農村で国民党の政治支配体制を覆そうと企てた作戦例の一記録がある。陳毅・新四軍第一支隊司令は、三八年一〇月、ある作戦を立てた。それは、李明揚（37・11任）、李長江の「（江）蘇・魯（山東）・皖（安徽）遊撃区正副司令官」二人を、「皇協軍」（親日軍）と批判し下層兵を寝返らせる作戦である。陳毅（皖南事件後、新四軍代理司令官）は言う。（我が軍〈新四軍〉は）「策略」を「戦略」とすべきだ⁽⁴⁹⁾。同作戦が成功したならば、揚子江下流域を行政支配する代表、韓德勤・江蘇省代理主席（後、38・5主席：江蘇省興化に赴、元・南昌衛戍司令）の「進退」問題に決定的な影響を与えられよう、と。

江蘇省（興化）の韓德勤（39・2魯蘇〈山東・江蘇〉戦区副総司令）・地方政府、及び安徽省（立煌）の李品仙（二一軍総指揮：広西派〈第六路軍参謀長〉領袖であったが、元々は唐生智西北系の出身）・地方政府を打倒することこそが、「日中戦争」はそっちのけに、新（編）四軍の、第一の戦争目的に変わった。

韓德勤八九軍・李明揚軍（駐江蘇二三軍〈第3戦区〉）、李品仙軍（駐安徽軍：二一軍〈第5戦区〉）を打ち負かすことが出来れば、揚子江下流三角地帯（南京・上海・杭州）を防備する国民（党）政府軍は、ほぼ壊滅する。そして南京城は共産勢力の支配する宏大な「海」の中に、都市の「孤島」として、全く孤立状態に陥るであろう。

一方、共産正規軍は、江蘇省東台に新編四軍が「（揚子）江北指揮部」を設けた。実動

部隊として、黄克誠第五縦隊（江蘇）、羅炳輝第五支隊（安徽）、及び譚縦隊（安徽）が、南京城の周囲を、隙間無く取り囲んだ。遮る筈の国民（党）政府中央軍（三二軍及び一〇軍）は計五ヶ師、約5万5千人程度の貧弱な規模に過ぎず、雲散霧消していたのだった。

後の『陳毅年譜』の中には、新編四軍が「通敵（日本軍）・利敵」行為を犯した国民（党）軍、「寝返り漢奸軍」を撃滅する誇らしげなシナリオが紹介される。

かつて「第一次南京事件」に歴史上に登場して来た共産党「擬装」部隊の作戦例を、我々は再び想起する必要があるだろう。今回についても新編四軍は、「（国・共）合作」政権下で共同作戦中にある訳だから、当然新四軍は、国民党地方政府軍の動き、配置を熟知して、その「擬装部隊」を使用出来る。ましてや、新編四軍の司令官は、元国民党軍きつての優秀な若手幹部であった葉挺である。また、新四軍は三七年一〇月以降、「国共合作」の名の下に、国民（党）政府から国民党軍の軍服を支給されていた。

「幻（まぼろし）軍」は国民党軍を擬装して、度々日本軍に、或いは時々は国民党地方政府部隊に対して挑発的ゲリラ夜襲を仕掛けることによって、偶々近くに潜んでいる国民党地方政府部隊（事実上は戦場逃亡、あるいは戦場迂回中であつたかも知れない）の所在を、間接的に日本軍側に告知し、攻撃させることがいとも容易出来た。

以上の様なシナリオを実行すれば、国民（党）地方政府部隊は当然、共産軍（新四軍）に対する報復攻撃を行うであろう。四一年初に起つた衝撃的な「葉挺捕縛事件」も、国・共摩擦が導いた頂点であつた、と考えられよう。また四三年「項英謀殺事件」についても、同様な事情が絡んでいた臭いが強いのである。

ところで、もしもこの様な摩擦ケースが発生すれば、国民政府（漢口、重慶）・軍事法廷はどちらに有罪を判定するだろうか？肝心の国民政府「国防政治委員会」は前半期（南京戦前後）、毛沢東が委員長を務め、三八年一月からの後半期は「国防軍事委員会・政治部」として周恩来が副部長、同部長は陳誠が務めた。

四〇年八月二六日付け『中美日報』によれば、陳誠が「戦地党政委員会」主任に任じられた。周恩来は副主任委員に任じられた当事者である。陳誠（蒋介石の異母弟であると噂が立っていた）は蒋介石の信任が最も厚かつた他、何しろ、三六年から山西、陝西、甘肅、綏遠、寧夏（共産党）辺区剿匪総指揮の任にあつた。共産党にとっては「天敵」を頭に被せられたに等しかつたであろうが、しかし一方、当時の戦況はそれ迄、（合作）華北戦域では第一八集團軍（八路軍）が圧倒的に増殖展開する勢いがあつた。それに威圧されて、しかも加えて、南京失守責任をことあるごとに引き合いに出される訳であるから、陳誠が口を噤む機会も多かつたことも想像も出来る。

「華中戦域」での軍令遵守判定では、敵前逃亡、通敵・利敵行為という軍令違反の嫌疑審査は、十中八、九、国民（党）軍の地方部隊側に、恐らく不利な判定が下されたであろう。この様に国民（党）政府軍人、行政官吏は合法的に追い詰められ、逃散、組織融解へ追いやられたのである。

一九三八年一、二月顧維鈞大使は、国際連盟第一〇〇回総会で、イギリス、フランス、

及びソ連をターゲットとして、必死に対中国援助の引き出しを探った⁽⁵⁰⁾。

四月二七日に到り、堀内外務次官とクレギー駐日英大使の会談は、上海海関問題について、次の様に一応の決着を見た。

1. 海関行政の政府機関たる海関監督者は、維新政府（38・3・28梁鴻志が南京に樹立）の吏員を任命し、それは海関におけるイギリスの旧来の実権を代表する「総稅務司」と地位を並立させ、形式上はその上位にあつて、監督の地位に立つ。
2. 外債支払い分担額の決定は、華北（臨時政府：1937・12・14王克敏が北京に樹立）、華中の両新政権の統括区域内の諸關稅を一括して、日華事變後の実績を基準に、大体の方針としては、外貨建てによって支払う。
3. 關稅收入の保管銀行は横浜正金銀行とする。

この上海海関に係わる「日英協定」（5月調印）によって、イギリスは国際的に、維新、臨時両政府を認める立場に立ったのであった。

日本軍が侵駐した、江蘇、安徽、及び揚子江流域三角地帯（南京、上海、杭州）では、国民（党）軍が追い払われた訳であるから、新たに「夜間」には、農村一帯に忍び込んで回帰したがる国民党地方政府と共産党に徵稅權爭奪（陣取りゲーム）が展開された。

その過程では、民間人（一般市民）を互いが取り込もう（農村基層幹部が国・共どちらの陣営に組するのか？と言う争いである）とした。中には、「新四軍」を自称する盜賊団の乱行（押込み強盜、身の代金を目的とする金持ちの子女の誘拐）も入り乱れた（「新七団」，「護國救國戰區縱隊」など、訳の分からない自称・共産紅軍が多数輩出した）。「漢奸狩り」が、「日中戦争」とは関係しに兩者によって際限なく繰り広げられた、と想像することが可能なのである。

「南京攻防戰」における日本軍は「正規戰」（師団會戰，砲兵戰）をのみ戰った存在であった。一方、これとは別に同じ「戰域」で、共産軍が、①三七年一月一二日以後延安・毛沢東の指令による抗日「ゲリラ戰」と、②三七年一月一〇日「以前」に、對国民（党）軍「ゲリラ戰」を、並行して實戰した「歴史的可能性」を、以上から私は推察する。②では、蔣・毛第五次剿共戰（34～36）の「暫定停戰協定」を、共産軍側が事實上破棄したのである。

周恩来は、三七年一月一〇日の「周恩来書簡」の中で、葉挺・項英軍の「戰鬪行為」が引き起こした混乱・衝突狀況から、国・共両軍仲介役としての「新四軍分局」（周恩来）の立場が、重慶国民（党）政府と新編四軍との間で「板挟み」の深刻な苦境に陥っている、と、延安中央・毛沢東に悲痛に報告している。

もし、葉挺・項英軍が日本軍のみを「国・共共同作戰」によって攻撃していたなら、周恩来の立場が苦境に陥ることは、絶対に有り得なかつたであろう。

共産軍の戰鬪では、正規砲兵による師団攻撃はまず起こり得なかつた。共産軍の通常戰

闘方法は、小銃（機関銃も）による攻撃が主であり、かつ「便衣（ゲリラ）」部隊が、一般市民の平服を臨機応変に着用し、民間人の「海」の中に潜み、一般市民を盾に使いながら、特に、夜襲を多く駆使した。

6. 小結 — 周恩来の共産党籍剥奪？

葉挺の最期は、まことにアッケなかつた。四六年四月八日、葉挺が山西省興県山中で墜落死した時、同機同乗者で同じく墜落死したのは、王若飛（27・3上海武装蜂起行動隊長）、邓発（広州起義参加）、秦邦憲（博古）の面々であった。皆が「周恩来グループ」の武闘派のトップ幹部達である。奇しくも、「日・中南京戦」と新四軍ゲリラ戦（恐らく擬装軍使用を含む）に係わるトップ・シークレットを知るフル・メンバー（周恩来、陳毅、譚平山を除く）だったのであった。

「揚子江三角地帯」を含めた江西・江蘇、安徽省全域（南京・上海枢軸を中心とする）を視野に入れると、「（第二次）南京攻防戦」前後に同戦域では「正体不明（所属不明）の死体」が続々と現われ、日本軍側は、敵軍死傷者数と戦闘規模が「勘定が合わない」と記録したのであった。戦後日本で、夥しい数の「南京戦幻（まぼろし）論」本が出版されたベースになっている。

「不可解さ」を今日の時点から歴史的に総括すれば、国・共間で「いつ頃第五次剿共戦（34～36）が再開された」か？（本稿では三七年一二月一〇日「以前」、と暫定的に結論付ける）という時期推定の問題に収斂されるであろう。「幻（まぼろし）軍」の全体像を具体的に抉り出し、検証した研究は、日本側に未だ出て来ていない。中国側の未公開資料（唐生智尋問調書、葉挺拘束の時の尋問調書を始めとして）の一般公開が、まず、待たれるところなのである。

さて、挑発作戦を展開すれば、当然に反発、反撃が起る。在「第三戦区（江西、江蘇、安徽）」国民（党）軍末端地方政府部隊と新編第四軍（共産紅軍：葉挺、項英指揮）の衝突が生み出した憎しみ感情は、凄まじいものになったことであろう。報復が、四一年初に「皖（安徽）南事件」での葉挺司令官の捕縛に、象徴的に繋がったと推測出来る。また、項英・副司令官の怪死（実態は明らかになっていない）についても、その疑いが濃厚である。

ただし、「合作」下にある中国共産党は、漢口（後、重慶：蒋介石）から、「軍事資金」の分配を受け続けなければならなかつた。けれども、華中の、逆上感情に駆られた末端国民（党）地方政府部隊による（と想定される、新四軍に対する）反撃、復讐戦は、当然、新編四軍にも、甚大な被害を及ぼす事態になったことであろう。それによって、共産党の内部においても、「華中武闘作戦」（揚子江流域三角地帯・幻〈まぼろし〉軍部隊作戦）の最高責任者であった周恩来に、次第に非難が集中する様になったことが考えられる。

やがて、周恩来は共産党内部から、国民党への内通者の嫌疑を受けたのであった。四二年七月二五日、周恩来は党籍剥奪の処分に処せられたと見られる。「駐渝（重慶）弁事処」

主任の周のポストは、董必武に、一時替えられた⁽⁶¹⁾。この事件では、葉挺が国民党のダブル・スパイである、と見られたのであろう。この周恩来の「処分事件」の折りに、周恩来を共産党内部から誹謗中傷する告発文は、次の様に述べて周恩来を弾劾した⁽⁶²⁾。「周恩来は（共産党）全党代表を騙って、蒋介石と密約を交わしたのだ。（かつて）『西安事件』の時には、（周恩来は）蒋介石の命を救った代わりに、その報奨として五〇万元を受け取り、香港・上海銀行（口座）に貯め込んだ」。

注

- (1) 第二次北伐軍に随行したソ連軍事顧問については、判澤純太『近代日中関係の基本構造』論創社、一九九七年、一〇七頁。
- (2) 判澤純太『法幣をめぐる日満中関係』信山社、二〇〇二年、二五九頁。
- (3) 『近代日中関係の基本構造』前掲書、二一九頁。
- (4) 譚平山については、『法幣をめぐる日満中関係』前掲書、第七章三節。
- (5) 波多野乾一『中国共産党史』第二巻、時事通信社、一九六一年、一一一頁。
- (6) 同書、一〇〇頁。
- (7) エッチ・オーエン・チャップマン（岡虎一記述）『支那革命の本質』亜細亜出版会、一九二九年、九五―九七頁。
- (8) 同書、一一〇、一一一頁。
- (9) 橘朴『中国革命史論』日本評論社、一九五〇年、八五頁。
- (10) 塩脇幸四郎『中国労働運動史』上巻、白揚社、一九四九年、一三五頁。
- (11) 同書、一三二、一三三頁。
- (12) 佐野袈裟美『支那近代百年史』下巻、白揚社、一九四〇年、五二一頁。
- (13) 『近代日中関係の基本構造』前掲書、四九頁。
- (14) 『支那労働運動史』下巻、前掲書、五二一頁。
- (15) 共産アカデミア附属世界政治経済研究所植民地部中国学術調査研究所編（パーベル・ミフ）『植民地民族革命におけるコミンテルンの戦略及び戦術（中国を実例として）』一九三四年、「第二章 中国革命の第二段階におけるコミンテルン」
- (16) 許芥昱（高山林太郎訳）『周恩来』刀江書院、一九七一年、七八頁。
- (17) 「清算周恩来」『現代資料』第六巻二期。
- (18) 『中国労働運動史』上巻、前掲書、一九三頁。
- (19) 橘、前掲書、二三四頁。
- (20) 『支那近代百年史』下巻、前掲書、五二三頁。
- (21) 瞿秋白の政治指導について、『法幣をめぐる日満中関係』前掲書、第七章三節。
- (22) 中国現代史研究委員会編『中国現代革命運動史』新民主出版社、一九三八年、二四五頁。

- (23) 「清算周恩来」前掲書.
- (24) 橘, 前掲書, 二三四頁.
- (25) 波多野乾一『中国共産党史』第四卷, 九頁.
- (26) 『近代日中関係の基本構造』前掲書, 二三七頁.
- (27) 同書, 二三八頁.
- (28) 同書, 二三九頁.
- (29) 『法幣をめぐる日満中関係』前掲書, 第七章五節.
- (30) 『毛沢東選集』第二卷, 外文出版社, 一九六八年, 一四一頁.
- (31) 『顧維鈞与中国戦時外交』伝記文学出版社, 一九七八年, 一八, 一九頁.
- (32) ソ連邦外交記録: A B P 対外政策記録文書類, 148項.
- (33) 鐘器声『蒋介石』広角鏡出版社, 一九七五年, 一四四, 一四五頁.
- (34) 『中国共産党史』第七卷, 六二八頁.
- (35) 『中国共産党史』第二卷, 前掲書, 三三二頁.
- (36) 同書, 一四七頁.
- (37) 『譚平山集』人民出版社, 一九八六年, 五八九頁.
- (38) 中保興作『最近支那共産党史』東亜同文会, 一九四四年, 二八九頁.
- (39) 同書, 二九一頁.
- (40) 徐詠平『陳果夫伝』正中書局, 一九七八年, 八二三頁.
- (41) 李天民『周恩来評伝』友連研究所, 一九七五年, 一五五頁.
- (42) 『周恩来軍事文選』第二卷, 人民出版社, 一九八〇年, 九五頁.
- (43) 王建民『中国共産党史稿』第三冊, 正中書局, 一九六五年, 一三一頁.
- (44) 『周恩来評伝』前掲書, 一四九頁.
- (45) 『中国革命人物詞典』北京出版社, 一九八八年.
- (46) 劉樹發主編『陳毅年譜』上卷, 人民出版社, 一九九五年, 二三一頁.
- (47) 『周恩来軍事文選』第二卷, 前掲書, 七四頁.
- (48) 『中国共産党史稿』第三冊, 前掲書, 三三四頁.
- (49) 『陳毅年譜』上卷, 前掲書, 二三二頁.
- (50) 董霖『顧維鈞与中国戦時外交』伝記文学出版社, 一九七八年, 一八頁.
- (51) 『最近支那共産党史』前掲書, 三七七頁.
- (52) 同上.

補論

1. 宣侠父「西安ルート」切断と「戴笠機関」

一九三八年五月, 戴笠は「別動隊教導総団」を改組し, 「忠義救国団」を漢口政府軍事委員会直轄機関として組織した. その規模は10個連隊(約3万)に相当する. 同戴笠軍

の管轄地域は、江蘇、浙江、安徽三省であった。「揚子江下流三角地帯」（南京・上海・杭州）と（北）京滬（上海）鉄道、滬杭（州）鉄道の両鉄道を主要防衛対象とする⁽¹⁾。これは、同地に着々と勢力を築きつつある江南共産「新編四軍」（7万:発足当初1万、後に30万以上に拡大）に比べて、明らかに劣勢であった⁽²⁾。華中日本軍（中支那派遣軍）が「点と線」を占領していたため、国民（党）政府が農村で夜間徴税を行うに当たって共産軍に比して不利であったことを、この関係は示している。

先んじて前三七年一月初、浙江省主席・黄紹雄は（第二次）上海戦役撤退に絡んで、杭州を「焦土作戦」によって自ら破壊しようとして蒋介石に持ち掛け、蔣に退けられていた⁽³⁾。蔣は黄紹雄には抗戦意欲が欠片も無い、と見抜いたのであり、代って翌三八年五月に、日・中戦争の天王山である「揚子江下流三角地帯」の守備を、戴笠に任せたのであった。

他方蒋介石は、三八年八月、（漢口）中央党部調査統計局を1～3処に改組し、2処調査統計局（「軍統局」と略称する：これと対比して、1、3処は「中統局」と略称）も戴笠の所管とした。戴笠が中將に昇格して、同2処も所管とした。世に知られている様に、「軍統局」とは国民党版KGB（あるいはチェ・カー）であり、その狙いが、漢口「合作」政府・「軍事政治委員会」（毛沢東の所管）から、「軍中憲兵機関」権限を奪い取って戴笠に与えることにあることは明らかであった⁽⁴⁾。

その後、漢口での蒋介石「総裁（38・3昇格）」は遷都・重慶政権期を通じて、蔣得意の「編遣裁撤」（軍改編に名を借りた、ライバル軍の解体、吸収）政策を試み続けたのであった。これに対して「新四軍」は、「偽軍反正（元の正しさに返す）」のスローガンを掲げて国民（党）地方政府を精力的に打倒する形で、蒋介石に逆襲したのであった。

この様な国・共攻防は、中央（漢口→重慶）政府・「参政会」（38・3・29国民党臨時全国代表大会で開催を決定した合作政府最高権力機関。同年七月六日から、漢口で第一回会議を開催した。定員数は当初150名。共産党からは毛沢東を初め七人の代表委員が参加）を舞台として、（1）「国共統一軍」建軍の戦闘序列作り、（2）「国民皆兵制」導入と新兵資格基準策定、等を巡って激しい遣り取りが交わされたのであったが、それは直接国・共両勢力の勢力比の構成に響くものであったから、まとまる筈も無かった。

蒋介石は一九三九年初から積極的な「反共政策」に転じた、と一般的に解釈されている⁽⁵⁾。この時期に江南地方で蒋介石と対応した「新四軍」の軍代表は、葉挺・項英から、四一年初の「皖（安徽）南事件」を経て、第二世代の「陳毅・粟裕体制」に移って行く。延安中央党六期六中全会路線（38・11）は江南新四軍に向けて「南を固め、東（日本軍）と戦い、北へ勢力拡大せよ（揚子江三角地帯と華北ソヴィエトの結合）」と指示した。

さて、一九三七年一月初、即ち日・中「南京攻防戦」の直前に甘粛省政府主席・賀耀組が、おりしも共産党から「（第二次）国共合作」を名分として派遣されて来た謝覺哉を危険人物だと見なして即座に追放する、⁽⁶⁾と言う事件が起った。同事件はそれに留まること無く、やがて三九年一二月一〇日「隴東事件」（甘粛東部）の発生として、国・共両軍の衝突に発展した。甘粛省・蘭州は西半中国を抑える戦略的要衝地であった。

- (1) 最大の航空基地が在り、同地を抑えれば中国西半の制空権が確保出来た。
- (2) 甘粛を抑えれば、新疆を封鎖することが出来、また、ソ連（コミンテルン）との連絡ルートを、国民党に阻害されずに太くすることが出来るのであった。

また、上のこの事件と重なって、同じく延安中央から共産党連絡代表として、宣侠父が西安（陝西）に派遣された⁽⁷⁾。宣侠父は延安と漢口（国民〈党〉政府）の連絡を、甘粛のルートと「ダブル・ルート」で通じさせる事を任務にしていた。しかし宣は三八年七月三十一日に失踪し、「戴笠機関」の手によって暗殺された⁽⁸⁾。北方では、三八年三月二八日に王克敏（37・12・14北京臨時政府樹立）がテロに遭難している⁽⁹⁾（命に別状無し）。

「戴笠機関」には「揚子江下流三角地帯」の農村オルグ工作を進展させて行く才能は持たなかった。「宣侠父事件」は当時揚子江沿岸を中心に活動していた周恩来の心胆を、恐らく震え上がらせたことであろう。しかし、八路軍と指揮系統の異なる江南土着の「新四軍」は、必ずしも「延安指令」に忠実ではなく、周恩来の統制下をはみ出して独自の戦闘を繰り広げたのであった。

注

- (1) 良雄『戴笠伝』上冊，伝記文学出版社，一九八一年，一九九頁。
- (2) 内閣情報部『週報』第109号（1938・11・16），四頁。興亜院華中連絡部『解散迄ノ新四軍』一九四一年，は，間もなく新四軍の兵力は約30万人迄拡大したとする（一頁）。
- (3) 良雄『戴笠伝』下冊，五〇六頁。
- (4) 『戴笠伝』上冊，前掲書，一五四頁。
- (5) 江紹貞『戴笠和軍統』河南出版社，一九九四年，一三二頁。
- (6) 同書，一八三頁。
- (7) 同書，一八〇頁。
- (8) 同上。
- (9) 『岡部直三郎大将の日記』芙蓉書房，一九八二年。

2. 小結 — 複雑な様相の「江蘇・安徽戦域」 — 韓徳勤89軍，李品仙21軍 vs. 葉挺，陳毅「新四軍」 — ；日・中「華中戦域」の戦況

趨稻奮が三〇年代から四一年（「皖南事件」）迄出版し続けた『抗戦』（その間『抗戦三日刊』，『全民抗戦』とタイトルが変更）6月号（38・3・・・23）は，安徽省政府が行政組織を「民衆総動員委員会」に改組したことを報じた。行政機関から共産党を排除することがその目的であった。三九年十一月，李品仙（桂〈広西〉系軍閥）が安徽省主席に就任した（同時に，豫皖戦区〈河南・安徽〉第21集団軍総司令に任）。李は上の「改

組」を更に推し進めた。

一方、一九三七年一〇月四日、南京・国民政府は「国民大会」を延期することを発表していたが、共産党は三八年三月二九日から四月一日にかけて漢口で開催された「国民党臨時代表大会」を、それに代るものだと主張した。後者は、「人民戦線内閣」の政府中枢を「参政会」（3ヶ月毎に開催する）だと考える立場である⁽¹⁰⁾。安徽省行政は、国・共間の奪い合いになった。

李品仙省政治と対決する共産党の独自省政改革⁽¹¹⁾要求は、以下の様であった。

- (1) 従来の「保甲制度」を破壊し、「工作団」（工・農・運輸・鉱等各種職能団体の代表組織）を省行政組織の骨幹にする（40・4「县区郷保甲長の民選実行令」施行⁽¹²⁾）。
- (2) 人民武装。（3）汚職官吏の処分。（4）言論、出版、集会、結社の自由保証。
- (5) 国・共軍事待遇の均等化。

さて、南京市から半径150Kmの円を描くと、そこには安徽省南部と江蘇省南部がスッポリと入る。南京陥落（37・12・13）以降同地域（その中心は「揚子江下流三角地帯」である。同地域は南京、上海、杭州3市を基軸として構成され、人口400万人、日本の九州とほぼ同じ面積である）は、「沦陷区」（日本軍の制圧地域）でありながら、国民（党）政府と「新四軍」の間で、省行政を奪い合った。溯って、一九三七年一〇月頃から蒋介石は「第二次国共合作」に大胆に踏み込みながらも、しかし一方では、秘密の形で江南で、特に「鄂豫皖（湖北・河南・安徽）ソヴィエト区」に「重点剿共」を仕掛けた⁽¹³⁾。

三八年一二月に周恩来が南昌（江西省）に入った（39・3・26日本軍〈中支那派遣軍〉、南昌占領）。「新編第四軍」を同地から統括することが彼（周恩来は延安「新四軍代表」）に任に与えられた任務であった⁽¹⁴⁾。先に五月上旬に、蒋介石は「新四軍」に対して、安徽省宣城へ進出するよう命じていた⁽¹⁵⁾。日・中「武漢会戦」（38・6～38・11）の後、三八年一月に日本軍が武漢を占領した。既に同年三月に「南京維新政府」の樹立があり、蒋介石としては武漢保衛の要・安徽省にコントロールが効かなくなっていた。そこで蒋には、「新四軍」を日本軍との正面戦闘に向かわせ、双方を消耗させて「漁夫の利」を得ようとする企てがあった。

三八年九月から周恩来（延安「新四軍代表」）と補佐役の葉劍英（八路軍南京弁事処代表）は、「蒋介石指示」に従って新四軍を「北上」させつつ、しかしその一方、華北八路軍（別称、第十八集團軍）を合わせて「南下」させる工作を実行した。黄克誠縦隊（彭雪楓支隊を併合）が「蘇（魯）皖（江蘇・山東・安徽）辺区」に「南下」して行く。この「北上」と「南下」の合体によって、「揚子江下流三角地帯」を共産党が圧倒的に獲得してしまうことこそ、延安（共産党中央）が意図するところであった。

従来の日・中関係史は「日・中関係」のみに焦点を当てているために、一九三八年五月「徐州会戦」を日・中戦争の歴史的分岐点であったと解釈しているが、実態はそうではない。これから述べる様に、「皖（安徽）事件」こそがその後、「日・中戦争」の方向を定めて行ったのである。

三九年一月一七日、韓徳勤・「第3戦区」副司令官が顧祝同に代って江蘇省主席に就任すると、韓は精力的に「第五次围剿戦争」を再開した。日本軍（中支那派遣軍）はしかし、「蚊屋の外」において、そのパノラマの展開の全貌を窺い知ることが出来なかった。一方で重慶政府軍が、三九年一月下旬から翌四〇年一月上旬迄、約五〇日間にわたって累計五〇万人の兵力を動員し、「冬季大攻勢」を日本軍に仕掛けるからである⁽¹⁶⁾。

一九三九年一月二三日付けの『新四軍征战日誌』⁽¹⁷⁾には、江（蘇）北で未曾有の「围剿戦」が「再開」されたことへの悲鳴が記されている。二月、蒋介石政府は「共産党問題處理規定」、「被占領区における共産党活動制限措置法」等の文書を秘密りに作成した⁽¹⁸⁾。

「新四軍」政治部の発表によれば、南京陥落（37・12・13）以降四〇年一二月迄に、国民党軍と共産軍の間に華中の地だけで数10回に及ぶ衝突があり、国民（党）政府軍は、張塗3ヶ師、李品仙3ヶ師、孫桐萱3ヶ師、李明揚2ヶ師、陳泰運1ヶ師、霍宋義1ヶ師、韓徳勤3ヶ師、何柱国1ヶ師、馬彪1ヶ師、湯恩伯3ヶ師、覃連芳2ヶ師団等の他、雑軍をも総計して39ヶ師団、延べ約80万の兵力が「围剿戦」を実施した⁽¹⁹⁾。

これに新四軍兵力を仮に約20万人と想定して上乘せすれば、正しく「百万会戦」があったと言える。中国共産党理論誌『群衆』第17期（1939・9・24）「江南偽軍工作を論ず」論文は、江南地方の「内乱状態」を描写している。ただし、汪兆銘新中央政府（国民政府・純正）による「清郷工作」は四一年七月から開始されるから⁽²⁰⁾、上の論文の時期にはそれはまだ始まっていないことに留意が必要である。

『群衆』第3巻22期（39・11・30）陳毅「敵後遊撃戦争を發展させよう」論文は、蒋介石に釈明を試みようとして書かれたものであった。同論文は主張する。

- ①新四軍は重慶政府の軍事法令を遵守している。
- ②偽軍が安徽、江蘇で新四軍を包囲している。
- ③新四軍は偽軍を徹底「反正」（正しく戻す）しなければならない。

この時期には、ソ連から重慶政府に対する膨大な資金支援が途絶えた（39・9・15 東郷・モロトフ「ノモンハン停戦協定」調印）。四三年頃からルーズヴェルトが重慶に資金介入を始める迄、「揚子江下流三角地帯」は各県長以下、行政機関が「ダブル・ライン」化した。

[1] 新四軍は江蘇省において、韓徳勤・省主席の八九軍（33師、117師）を壊滅させる必要を痛感した。黄紹雄（浙江省主席）は金華において、福建方面（台湾正面）を警

戒していると言ひ逃れしながら、逼塞していた。また、李品仙（安徽省主席）は遙か立煌（安徽省・合肥西方：河南，湖北省境であり武漢〈湖北省〉保衛，又は要の要衝である）において「第5戦区」が所管であり、「第3戦区」（安徽，江蘇）においそれと出陣することは難しかった。

新四軍が採用した第一の戦略は、「日本軍の残虐行為を告発する」宣伝ビラを大いにバラ撒くことであった⁽²¹⁾。しかし、「日本軍と戦わない軍隊」⁽²²⁾として名を馳せた新四軍の真の目的は逆に、韓徳勤89軍を、日本軍との戦闘を回避し「正規軍として著しく資格に欠けている」と弾劾することにあつた。なお、この時、共産軍は独自の軍規律を持ちながらも、国民政府（南京→漢口→重慶）からは兵役を免除されていたことを、我々は再度確認しておかなければならない。「国民皆兵」制度導入は漢口政府「参政会」で盛んに議論されたが、当然、国民、共産両党の利害が一致する筈も無かつた。

四〇年一月七日、重慶中央軍事委員会は遂に、「新四軍解体命令」を下した⁽²³⁾。これに激しく反発した「新四軍」は、同年六月三〇日から一〇月中旬迄に、李明揚軍（韓徳勤89軍指揮下，蘇魯皖辺区遊撃軍：兵力5,5000人）を撃破し⁽²⁴⁾，宜陵鎮（江蘇省・泰県西隣り）を占領した。国民（党）地方政府軍を、揚子江を挟んで「南北遮断」する意図があつた。この戦いのハイライトは一〇月一五日の「黄橋の戦い」の勝利である⁽²⁵⁾。

[2] 事態がこの俛で終わる筈が無かつた。蒋介石は新四軍に、四〇年一二月三十一日迄に揚子江「以北」に移動するよう通告した。この状況が、四一年一月九日、安徽省・蚌埠，合肥をめぐる国共衝突を導いたのであつた。「皖（安徽）南事件」である。同地を確保すれば、江蘇省・興化も自然に手に入り、それはつまり、中国全九戦区の中枢部分たる「第3戦区，第5戦区」を、全権支配出来るシナリオである。

顧祝同・第3戦区司令官は、52師，40師，44師，70師，新編7師，その他雑軍を合わせて、総計104師団（約30万人）を動員し、安徽南部の新四軍を囲い込んで、渾身の力で総攻撃した。それは顧が動員出来る最大限の軍事力であつた⁽²⁶⁾。尚、この時であっても、日本軍は主として湖北省・宜昌での陳誠75軍との会戦に没頭しており、何と！「皖（安徽）南」での「中・中大会戦」に関する情報をほとんど持たなかつた！

ところで、同四一年六月二七日には汪兆銘が国民政府（純正）代理主席に就任した（6・23独仏休戦協定調印）。

さて、この時期の中国共産党理論誌『群衆』第5巻12期（41・11・25）には、①11月12日の孫文先生生誕日の祝辞や、②蒋介石・軍事委員長が朱徳指揮の（華北）抗日「百団（連隊）大戦」（40・8～40・12）大勝利を絶賛した、と宣伝する記事が登場した。「百団大戦」は戦闘員の減耗が両軍に起らない特徴的戦闘であつた。中共軍は日本軍のいない間に、日本軍の軍用倉庫（食糧貯蔵所が中心），軍事電線，あるいは近在ダムなど大型公共施設を、一時に、多数の箇所を破壊する「遊撃戦」（と称した）を実行した。朱徳は早速「戦果」を華々しく公表したが、しかし、蒋介石にはその真偽を確か

める方法が無かった。しかし、注意すべきは、蒋介石が「新四軍」に下した「解散命令」が、『群衆』誌では一切言及されていないのである。

新四軍は「皖（安徽）南事件」を経ることによって、蒋介石への恭順姿勢を表面上装ったが、裏では陳毅が国民党に捕縛された葉挺・司令官に代って代理司令官に任じられて指揮を引き継ぎ、安徽、江蘇に引き続いて勢力を浸透させて行った。安徽省は、却って、中国の第二の共産ソヴィエト区を擁する省に変わった⁽²⁷⁾。この間に一方、国民（党）政府（重慶）の方は、日本軍との「第三次長沙大会戦」（1941・12・19～42・1・4）に軍事力の総力を傾注して行ったのであった⁽²⁸⁾。

さて、劉少奇は一九四一年五月一〇日、華北中原局から中共中央華中局書記（揚子江流域工作）に転じた（副書記、饶漱石）。これは、新四軍が「葉挺・項英体制」から「陳毅・劉少奇体制」に組み替えられたことを意味していた。この時に劉少奇は叫べた。「華北戦線蒋介石は、八路軍（華北共産軍）を日本軍との正面戦場に立たせて、消耗させる作戦を露骨にしている！⁽²⁹⁾」。「華中こそは国・共必争の地である」、と。二月一八日、劉少奇・陳毅は李長江（38・5蘇北第2遊撃部隊副総指揮：李明揚の副指揮官）を「漢奸」と公に告発した⁽³⁰⁾。イデオロギー戦を正面から国民党地方政府に挑んだのであり、全江蘇は社会層が真っ二つに分かれて、際限の無い両者の「漢奸狩り」が惹起された。

注

- (10) 波多野乾一『中国国民党通史』大東出版社、一九四三年、五三七頁。
- (11) 『抗戦』第六〇号（38・4・6）。
- (12) 興亜院華中連絡部編『新四軍ニ関スル実体調査報告書（蘇皖省境津浦線東部地区ノ部）』一九四一年五月。
- (13) 『安徽革命回憶録』安徽人民出版社、一九五九年、一八五頁。
- (14) 『江蘇革命烈士伝選篇』江蘇人民出版社、一九八八年、一四五、二八三頁。
- (15) 『外務省執務報告』第六卷、東亜局、クレス出版、一九九三年、六二〇頁。
- (16) 蔣緯国『抗戦八年』早稲田出版、一九八八年、一〇四頁。
- (17) 『新四軍征戦日誌』解放出版社、二〇〇〇年、七八頁。
- (18) 中国国際戦略研究基金会編『対日戦争史録』一九九五年、三三一頁。
- (19) 興亜院華中連絡部編『解散迄ノ新四軍』一九四一年、一八八頁。
- (20) 『中国国民党通史』前掲書、六一八頁。
- (21) 『解散迄ノ新四軍』前掲書、七〇頁。
- (22) 一九四〇年一二月二五日『朝日新聞』
- (23) 『解散迄ノ新四軍』前掲書、二〇六頁。
- (24) 同書、一八九頁。
- (25) 『江蘇抗戦』档案出版社、一九八七年、一六三頁。

- (26) 『何（応欽）上将抗戦時期軍事報告』上冊，文星書店，一九六二年，付表9.
- (27) 『対日戦争史録』前掲書，四五一頁.
- (28) 『抗戦八年』前掲書，一二六頁.
- (29) 『江蘇抗戦』前掲書，五四頁.
- (30) 同上.